

# 「澁澤写真」の喜界島の馬を見て

高坂 嘉孝

「澁澤写真」の喜界島の写真が撮影された昭和10年から11年（1935～36）、おそらく喜界島（鹿児島県大島郡）には在来種の雄がいないか、いても<sup>せん</sup>騮馬となり交配はされていないものと思われる。

喜界島からトカラの島に馬が移されたのが明治30年（1897）とされる。現在トカラの島と鹿児島県本土に残るトカラ馬の始祖は、喜界馬だったのである。その後喜界島では大正時代にさらに馬の改良が進められたというが、トカラに渡った馬と昭和11年当時の写真に見る在来種の馬とでは、大きな差異はなかったのではないだろうか。昭和11年の喜界島にはおそらく、小型の在来種、大型の外来種（主として軽種）、そして色々な形質を持ったそれらの雑種が混在していたことだろう。

太平洋戦争が近くなった頃から戦中にかけて、喜界島からも多くの馬が徴用されたことだろうが、その実態は明らかではない。喜界の馬も他の徴用馬と同様に、例外なく1頭も再び島に戻ることはなかったはずだ。

戦後貴重な労働力として、運搬手段として、そしてまた有機肥料の製造源として急速な増殖が計られ、一時はこの小さな島に4000～5000頭に及ぶ馬が飼われていたと聞き及んでいる。しかし、戦後に撮られた写真に在来種と思しき馬を発見することはない。そして、昭和30年から40年頃にかけて急速な数の減少がみられ、現在に至っては喜界島で生まれ育った馬は途絶えた。ということは、昭和11年当時の在来種の雌馬は、そのほとんどが繁殖能力を既に失う年齢に達していたのかもしれない。

喜界島の歴史の中で、馬なしでは語るができない時代がかつてはあった。そこには数百年に及ぶ馬にかかわる文化が、初めは外から移入され、そして島の人々の工夫によって生み出され伝承されてき

た。また明治以後、外へ向かって発進する時代が、つい数十年前まで確かにあった。猛烈な勢いで馬が減っていった昭和30年代、40年代、喜界島で生まれ育ったそれらの馬たちは一時期沖縄の島々の農業や物資輸送の主役を担っていたことだろう。

今や喜界島の馬の文化、馬にかかわる事柄が忘れ去られようとしている。昭和10年から11年にかけて撮影された多くの写真の出現は、そこに写る馬たちが島になくなくてはならない大きな存在だったことを思い起こさせてくれたはずだ。このかわいい、飼い主の思うままに働いた馬たちが、喜界島で果たした大きな役割と、その占めていた大きな位置をもう一度思い返さないわけにはいかない。これらの写真が、島の歴史とともに歩んだ馬たちのことを今一度振り返り、少しずつでも掘り起こしてくれと訴えてくるようだ。

これから、喜界島の馬の歴史にささやかでも光を当て、伝える努力をしよう。馬たちに感謝の心を持って。

なお、以下に見ていく馬の写真では、馬の労働風景や乗馬の風景が見られる。しかし馬車がない。その当時農家は馬車を所有していなかったのかもしれない。馬車を使う運送業者はいたことだろう。また島に残る戦後の馬の写真にも、ほとんど外来種の血液といってもよい馬になってさえ、例外なくオモガイが見られる。戦前外来種の種牡馬や牝馬が導入された時、西洋の馬具も一緒に島に入ってきただろうと思われるが、使われなかったようだ。

また、次ページから下す「澁澤写真」の説明文で太いゴシックの活字の文はもとから「澁澤写真」に付せられていた説明文であり、カギカッコ内の番号は日本常民文化研究所の整理番号を示す。そのあとに続く明朝体の活字の文が私のコメントになる。

（こうさか・よしたか）



写真1 政重吉君 農業日誌記録者（喜界村湾）  
昭11.2 [3-46]

「風景としての情報」（『手段としての写真』2007年刊所収）の写真説明には、聞き取り調査による「在来種の喜界馬だという」との一文がある。この写真の馬の鼻筋が白く見えるのは、白徴（鼻梁白）なのか光の反射なのか不明。白徴だとしたら在来の喜界馬とはいえない。一見在来馬のようだが外来種との雑種かもしれない。この馬の個体的な特徴として、体躯に比して頭が大きい（頭が重いと表現する）。はなはだ体躯の幅を欠く。生来のものか、栄養不良か、あるいは他の疾病のためかもしれない。後肢の過長蹄、さらに蕪蹄（大きくそり返り、スリッパ状に変形した蹄：多くは蹄葉炎が慢性化して起る）気味であり、蹄の手入れ不良だけでなく、かつて大きな病気をし今も後遺症があるものの、大事に飼われていると解釈したい。写真右手、簡単な作りの畜舎の前に木製の鞍が見られる。形から乗馬と駄載の兼用と思われるが、どちらかというところ、駄載に利用しやすい作りである。



写真2 正月ノ砂運び（喜界村川嶺）  
昭10.12 [2-15]

説明に「正月ノ砂運び」とある。川嶺の人という。当時は集落ごとに着ている物の特徴があったという。馬の左右に大きな砂の袋をバランスよく積んでいる。細い流星があり、いかにも西洋種の顔つきである。決して大きくない体格で、在来種に近い体形の雑種と思われる。左手綱1本での制御の様子が見てとれる。



写真3 正月買物に行く人々（喜界村川嶺）  
昭10.12 [5-35]

馬3頭の乗馬風景。湾集落から上嘉鉄へ抜ける道。遠景は百之台の東の段丘。今はこの写真のほぼ真中に通称「ゾウの檻」（自衛隊の通信基地）がある。その下に川嶺集落があるが、手前にはない森林が写っており、集落のありさまは見る事ができない。3人連れ立っての外出か。いずれも帽子をかぶり、着物を着ている。羽織も重ねているようだ。鞍の有無は不明。左の2頭は外来種か、あるいは在来種との雑種のような。右の1頭は小型で、在来種を思わせるシルエットだが、どうも栗毛のようであり、在来種の特徴を残した雑種ではないだろうか。





写真4 甘蔗運搬 昭11.3 阿伝 [8-3]

サトウキビの駄載。オモガイが左右2本からなり、上部を狭く紐で繋いでいるのが明瞭。この馬のオモガイの作りは直線的なのが特徴。この馬も四肢の細さが際立っている。写真6に比して表情が穏やかな印象を受ける。ほぼ純粹な在来種かと思われる。後出の写真6とは別個体。



写真5 甘蔗運搬 昭11.3 阿伝 [8-6]

写真7の個体と、同6の母子馬の授乳風景。左の馬はモウコウマを思わせる頭部である。



写真6 乗馬（砂糖黍運搬に行くところ）  
昭11.3 阿伝 [8-2]

親子の馬（写真5に授乳風景がある）。戦国絵巻に描かれる馬のように、ちょっと顔がしゃくれている。純粹の在来種の可能性が非常に高いと思われる。この子馬の前肢の白毛（ソックス）、前肢以下の骨量から、この子馬の父馬は外来種であろう。母馬はオモガイを付け、左手綱1本での制御である。鞍も輪郭が不鮮明だが、写真22等の牽引作業用とは明らかに異なる。鞍は乗馬、駄載の兼用だったかもしれない。



写真7 甘蔗運搬 昭11.3 阿伝 [8-5]

写真4と同一個体と思われる。同6の母馬と比較すると重い頭部をしている。鼻から唇にかけ白いのは白毛なのか皮膚病なのか不明。



写真8 甘蔗運搬 昭11.3 阿伝 [8-4]

前出の写真4と同6とは別個体の2頭の駄載。積んでいるのは、サトウキビ。後方の馬は不鮮明だが、手前の馬は在来種か雑種か判然としない。手綱を木の切株か、キビ（おそらく）にしばってある（写真中aの部分）。



写真9 甘蔗運搬 昭11.3 阿伝 [8-7]

荷を運び帰路につく2頭。前に行く馬は写真8の前方の馬、後の馬は同じく写真8の後方の馬である。前の馬は判然としないが、後の馬は、頭部の大きさ、首の長さ、高さから外来種を思わせる。雑種の可能性が大きい。





写真10 砂糖黍運搬（其の一）於蒲生村  
昭11.4 [3-25]

サトウキビを駄載する馬。白徴があり、あまり大きくなさそうで、雑種と思われる。御者は右手に枝を、左手に1本手綱を握る。後ろは砂糖小屋と思われる。



写真11 田のワク [8-14]

馬による犁かけ。水田には、まだ水がひかれていない。田の一角には代かき道具がおかれている。馬はやや小格の、在来種と外来種の雑種のような。体高低く斜尻。尾が低く付く。前軀は外来種の、後軀は在来種の特徴を表している。鞍は牽引作業用である。



写真12 アブシ（畦）練り マー入れ  
蘇鉄刻み（肥料） 昭11.3.27 阿伝 [8-15]

左端の青年（拵嘉一郎氏とのこと）は畦打ち。右の婦人は、耕起前の水田の前作の片付けか。青年の後ろの水田や畦畔に残るのは、（説明文には蘇鉄刻みとあるが）あるいは収穫後の空豆稈かもしれない。婦人はその処理作業の終わりを表現していると思われる。後方では馬による代かき。写真16と同一の人馬かもしれない。1カットに4つの水田風景を盛り込んでいる。なお空豆は拵氏の『喜界島農家食事日誌』にも確かよく登場したと思う。今はもう稲作の水田はない喜界島だが、サトウキビの収穫から春植えまでの間作であったり、夏植えキビの畝間での自家用植え付けだったり、全体としては空豆の栽培面積は決して少なくない。収穫が間にあわなければ、緑肥ともなる。今は以前のように葉までも食べる人はいないようだし、食卓に上る機会も減ったように聞く。島の空豆は不揃いで小粒だが、濃い味が身上だ。



写真13 田のワク（ワクは耕すこと——馬にて）  
昭11.3 阿伝 [8-18]

水田の犁かけ作業。右手で犁を操作し、左手でオモガイに繋がれた手綱で馬を制御する。馬は外来種の血量の濃い栗毛。



写真14 シルタ（しつけ終ろうとする田）の  
マーク入れ [8-20]

※写真16、17の説明原文には「マー入れ」となっているが、この写真の説明文には「マーク入れ」と記載。

代かき風景。馬は完全なアングロ・ノルマン系外来種といってもよい。ごくわずかの重種（ドラフトホース）の血量を持っているかもしれない。全く外国風の作りを持つ馬と、南西諸島ならではの馬具と馬の制御の取り合せがおもしろい。馬体の右側。代かき道具は、柄の中央ではなく左はしを右手で持って支持している。



写真15 田のワク 昭11.3 阿伝 [8-19]

写真13の同一人馬。馬は流星、鼻白。写真13、同15は馬体の左右を見せ、馬に装着の馬具と人による操作と作業内容全てがわかるようにしてある。御者の手の使い様が最も鮮明な写真である。この馬は相当の年齢を感じさせる。写真13では判然としないがこの写真では腰から腹（上臍部）、大腿前部にかけての変色部が見られる。おそらく長年にわたる使役での、道具による擦過傷が癒痕化したものと思われる（a）。臀部の変形した様子も見られる（b）。





写真16 シルタのマー入れ（ただしこれは種を下す直前のマー入れ）昭11.3.27 阿伝 [8-22]

写真14、17と同じく代かき風景。同13～15、17の馬とは明らかに異なる外観である。小型で、首が短く、若干斜尻。純粹の在来種かもしれない。機敏でバネの強い印象を受ける。



写真17 シルタのマー入れ 昭11.3 阿伝 [8-21]

写真14の馬と人物。同14のやや左側地点からの撮影。折り返して同14と、右左逆からの撮影となっている。額から鼻梁、口唇に至って白い大流星をみとめる。山すその中央の畑にはサトウキビの穂が明瞭。



写真18 稲運び 阿伝 昭11.8.1 [8-45]

水田から脱穀作業場となっている海岸地帯へと稲束を運搬して来たのだろうか。ほぼ純粹な外来種といえよう。



写真19 麦小積 荒木 昭11.5.2 [3-13]

におに積まれているのは麦。人を乗せる馬は、その大きさ、体型から在来種と外来種の雑種であろう。大切に保存されて使われたのは稲藁かもしれない。農村の日常生活の中で、藁縄、むしろ、屋根の補修材、燃料、堆肥の原料、牛馬の飼料・敷料、敷物、草履、草鞋、はてはフトンの中身に至るまで使われていた。



写真20 藪掘り [3-3]

農夫が母馬の背に荷とともに。後には、1~2才の子馬。どちらも尾が高い位置にあり、臀筋が適度に発達する。また、子馬は足が左2本白（ソックス）のようなので、母馬は雑種。子馬の父馬は雑種もしくは外来種（アングロノルマン系）と思われる。



写真21 馬耕 [3-20]

百之台のサトウキビ畑か？ キビ収穫後の更新作業と思われる。一度に馬4頭を使つての犁かけ。2頭だてや4頭だてで大型の農器具を使つての耕起でなく、小型農器であくまでも1頭での作業体系だったことを示している。その方が簡単な器具で、機動的に作業をこなせたのであろう。この4頭は大きさといい、体型といいよく揃っている。在来種か雑種か判然としませんが、人物の身長と比較して、全て雑種かもしれない。しかし、在来種の特徴も多く見られる。





写真22 薯植 (Fansuiwiji) その一 阿伝第四報  
公農事小組協同作業 昭11. 6. 30 [5-5]

馬の犁、人力による鋤うちに見える。まさに人海戦術。馬は小格で華奢であり在来種かもしれないが、外来種との雑種のようにも見える。左手綱による馬の制御をよく示す。山の急な斜面は段々畑になっているようだ。耕地の手前半分ほどが耕起されたあと。馬が写真23の位置まで進むが、その後方で多くの人が働いている。鋤で耕しているというよりは、稲の前作の作物（例えば空豆）の残渣を掻き集めて片付けているようにも見える。馬耕の前段階の準備を事前にするというより、ほぼ同時並行的に進めているようだ。

写真22、23はほぼ同一地点からの撮影である。一見すると時間の前後が同23、22の順で馬の犁かけの後からの人の鋤うちのように思えるのだが、実は逆の同22、23の順で、一枚の畑での、人が耕起準備をしながらの犁かけである。



写真23 薯植 (その二) [5-6]

他の写真（写真5～7、9、11～17）にもあるように1本の手綱、常に左手綱によるオモガイを介しての馬の制御がなされている。写真22の馬には肩あてを装着しているかもしれない。また鞍は作業用もしくは牽引用のものである。



写真24 牛の品評会 [5-26]

牛と人の集合写真。小野津集落。いずれも黒毛和種の雌牛。地域の品評会（今でいう牛の共進会）の一コマと思われる。今日鹿児島県の和牛の飼養頭数は全国一位。大型の堂々とした体躯が特徴だが、当時の牛もなかなかのものである。



写真25 島の牛 小野津村 昭11.8 [5-27]

写真24の一部。牛列のさらに前面になる。後方に親子の牛がいて、授乳中と思われる。また、右から2頭の牛も授乳中と思われるが、若い母牛(角が短い)で、授乳のため削瘦傾向にある。右から4頭目の牛は鼻鏡おきなわしじょうちゆうしじょうが白い。沖縄糸状虫症という病気が、戦前既に喜界島にあった証明。



写真26 牛耕(喜界島にては全く珍しい。ほとんど馬耕である) 昭11.4 阿伝 [5-4]

牛による犁かけ風景。阿伝集落では牛耕をする人はいなかったという。牛自体がいなかった。場所は不明。牛は小型の和牛の雌。栄養状態は決して良くない。形は不明瞭ながら鞍は極く小さい。手綱は1本のように、鼻環に結ばれている。農作業中の農夫が着ているのはおそらく木綿の単衣。



写真27 山羊焼(其の一) [4-14]

ヤギの屠殺状況の一枚。小型で有色、雄の山羊。肉髯はない。『世界家畜品種辞典』(東洋書林、2006.1.22刊第1刷)によるとトカラ山羊は雌雄とも有角で耳は直立とある。この写真の山羊は角があるか無いか判然としない。白色のザーネン種等との交配で有色の山羊は沖縄県の島々では極めて少ないものの、現在の喜界島には有色の山羊がかなりの数見られる。山羊の白毛は優性である。沖縄と並んで奄美地方の山羊食はよく知られている。喜界島の山羊の風味の良さは、山羊好きの間には知られるところとなっている。